
幸か不幸か

情報屋 < 孔陽 >

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸か不幸か

【Nコード】

N1295Z

【作者名】

情報屋<孔陽>

【あらすじ】

あー、何て報告しようかな……。まあ、分かりやすく説明すると、本日未明、宮城琴栄は死亡？消滅？いたしました。可愛い神様の配慮により、色々と世界を旅して（死神とかハンターとかetc.）偶に神様の雑用をお手伝いしながら、楽しい？人生を歩んでいこうと思います。

報告します。わたし、死んだみたいです。

ゴロゴロゴロ

ピカッ

ゴロンゴロン

ここ最近雨が降り続いていた。それを私、宮城ミヤシロコトエ琴栄は憂鬱な気持ちで2階の窓の自室からその様子を、何をするでもなくただボーッと見ていた。今だに止む気配のない雨に鬱蒼としながらも、オレンジ色とも黄色とも云えない光をひたすらに眺める。

鬱蒼とした中、光と音の間隔ではこちらには落ちてこなさそうだと、ぼんやり考えていた時。それは起こった。

ドガツシャーン!!!!.....ゴロゴロゴロ

今迄にない青白い光を放つ雷。いや、もはやこれは電気と言っていいかもしれない。兎に角、その青白い雷は物凄い雷鳴を響かせて、琴栄の住む家へと真っ直ぐに落ちてきたのだ。幸い、家には琴栄以外誰も居なかった。その為、琴栄だけが雷撃を全身に受けることになった。しまった。

そして、その雷を受けた本人はというと.....

「……何処、ここ」

見知らぬ場所に何故か立っていた。

「一体なにが……」

凄い雷がしたと思ったら、その後物凄い衝撃が全身を駆け巡った。だが、あれだけの衝撃を受けたにも関わらず、痛みは案外すぐに引いてしまった。

そこで、やっと落ち着いて周りを見てみれば。白、白、白の真っ白い空間に居た。と言うわけである。

これだけでも、普通に混乱するのに、どうしてか。私の目の前にはツインテールの可愛い少女が目いっぱい涙を浮かべながら、泣くのを我慢するように此方を見ていた。

次から次へとわけの分からない事が沸いて出てくるそんな状態に、私はますます混乱してしまった。なにせ、突然雷に打たれたと思ったら、今度は知らない真っ白い部屋に居て、しかも金髪碧眼の可愛い女の子が今にも泣きそうな顔でじっと見られているのだ。そんな状況に混乱しないわけがない。……それなのに、一体自分は何をしているのか。

いつの間にか、私はその少女にやさしく声をかけていた。

「…何故泣きそうな顔をしているの？」

そう声をかけて、内心自分の行動に自分で驚いていた。だが、そうして声をかけた少女は

私の意に反して、更に顔を歪めながら、辛うじて出て居なかった涙をボロボロと、今度は堰き止めていた水が決壊したかのように泣きだしてしまった。

「うわああああああん、あああうわああああん」

「えっ・ちよ、ま、ええ!？」

それによりいっそう混乱する私は、なんとか目の前の女の子を落ち着かせようと、優しく抱きよせ、背中をぽんぽんとリズムよく撫で続けた。

そうやってあやし続けてから15分程……

なんとか落ち着きを取り戻した少女は、腕の中からそっと抜け出すと、可愛い瞳を真っ赤にさせながら小さく謝った。

『……………ごめんなさい』

一体何が「ごめんなさい」なのだろうか。私にはよく分からなかったが、きつと見知らぬ人にあやされて、恥ずかしかったのだろうと勝手に判断した。

「大丈夫だよ。気にしないで」

だから、私は少女を安心させるように笑顔を浮かべるが、それに少女は違つというように何度も首を横に振るつた。

『ち、がっ』

「えっ？違つもの？」

では、何に対して泣いていたのか。と驚く私に、少女はまたも悲しそうに呟いた。

『わたし、貴方を殺してしまった』

「は？」

『わたしの力、暴走して、かみなり　ヒクッ』

そこまで云うと、また泣きだしそうにしゃっくりを出す少女に私は困惑しながらも、なんとか話を理解しようと、少女を宥めながら詳しく話して欲しいと頼んだ。

そして、1時間後……

「つまり、私はこの世界の管理者である貴方の暴走した力。つまり、あの青白い雷？に直撃して私は住んでいた処から存在ごと消滅した、と」

『……はい』

「しかも、予想外の死に私は輪廻の輪からも外れ、生まれ変わりも出来ない、と」

『……はい』

「さらには、その力が少しとはいえ、あるうことが私の魂に宿ってしまった、と」

『……はい』

「外すことも出来ない、と」

『……はい』

「なんとも、本末転倒だね……」

『うつつ、……はい』

「『……………』」

状況を把握したところで、私と少女の間に暫くの無言が続く。しかし、その状態も長くは続かなかった。

突然のことで、かなり混乱してしまっただが、とりあえず私は今後の身の振り方を考えた方がいい。と、早々にぐちぐちと悩むのを諦め、目の前に居る管理者の少女へと声をかけた。

「それで、私今後どうすればいいのかな？」

『え？』

よっこらしよっと、腰をあげながら言う私に、自分の反応がそんなに予想外だったのか。少女は驚きを露わに呟いた。

「いや、え？じゃなくてね。私このままじゃ転生も出来ないみたいだしさ。どうすればいいのかわかって」

そう、今だ驚いたままの少女に問えば、急に慌てだしたように私の質問に答えてくれる。

『あ、そ、それは一応此方でも考えてあります。でも、本当にいいんですか？』

「ん？何が？」

少女に背を向けて、凝り固まった身体を伸ばしながらほぐす私に、少女は問いかける。

『わたしの責任とはいえ、貴方から家族も友達も奪ってしまったのですから、恨みごとの1つや2つ覚悟していたんです』

「ああ。そういう事ね」

伸びをしていた腕を下げる。少女は得に気にした風でもない私に疑問が浮かんでいるのだろう。だが、

「まあ、未練がないっていったらそうでもないんだけど。でも、何でかな…」

少女に背を向けて立っていた私はゆっくりと少女を振り向くと、今の私にできるだけ精いっぱい笑顔を向けながら、少女の疑問に答える。

「私は君を恨んだり、責めたりできないんだよ」

それに、目を見開く少女。

「私は自分でいうのもなんだけど、変わった子でね。幼い頃から何かしら達観した子だったんだ。お陰で別に知りたくもない事や、知らなくていい事なんかを自然と知ってしまう形になってしまった。

ふふ

まあ、大人たちにバレると色々厄介だったから、表面では誰にも悟られないように子供らしく振舞っていたよ。案外、私は嘘が上手くてね。子供ながらに、自分でもよくやる。と思ってたよ。まあ、その代わり裏側ではどんどん夢も希望も荒んでしまったけれど。…：周りは私を手の掛らないいい子だと褒めはやしたてていたっけ。それと同時に、いろんな【想い】が冷めきっていったなんて、誰も知らないんだろけどさ。

まあ、そんな私はいつしか心に凍えるような冷たさを持つように

なつてね。普段は大人しい私んだけど、敵になる者には一切の赦容もしなかった。それが、かつての友人であった者であろうとも。それで、私から離れて行く者が出たとしても、私は引きとめようともしなかった。

そんな頃、私は自分が怖くなった。この心に蔓延っている冷たい何かが、いつしか取り返しのつかない何かを壊してしまうのではないかと。そんな恐怖からか、私は他人の心に酷く敏感になった。今迄でも、環境が環境だったためか。常に他人の心には敏感だったが、この頃から更に激しさを増していった。

……いつの日か、私の理性が闇へと消えた時。その時こそ、私が私である所以を無くす時だと無意識に感じとっていた。そして、それがいつしか私という存在を消すことになってしまっても。私が私で居られるのなら、恐れはしないだろう。

そんな、環境に居たからこそ。君から真の後悔の念が伝わってくる。私の為に本当に悲しんでいることも。それが分かるから私は君を恨んだり、責めたりすることはない。

むしろ、少しすつきりしているんだ。だから、そんなに泣かないでほしいな。私も女だけど、同じ女の子が泣いている姿は正直辛いことこの上ないからね。」

苦笑しながら言う私に、少女はまだ少し泣きそうな顔をしていたが、微かに笑ってくれた。それを見ながら、やっぱり女の子は笑っている方が可愛いよね。と一人ひっそりそう思いながら、少女の小さな頭をやさしく撫でてやるのだった。

そんな私に少女が小さく『ありがとう』と呟いた声を聞こえないふりをしながら。

5つのチカラ

お互いに理解し合えたことで、私は改めて少女と向き合った。

「改めまして、私は宮城琴栄^{ミヤシロ・コトエ}。琴栄でいいよ。貴方は？」

『わたしは、貴方がたの住む 地球 ? 000981423を管理している管理者。貴方がたから云う神のようなモノで、名をサシャーリ・ルメルディアと言います。サーシャとでも呼んでください』

なんとも堅苦しい自己紹介だが、この子の名前が分かっただけで良しとしよう。

「おk。じゃあ、サーシャ。私は今後どうすればいいのかな？」

『はい、琴栄さんには大変申し訳ないのですが、異世界を幾つか自由に周って頂き、偶にわたくし共【神の使い】として、お手伝い頂きたいのです』

「え？」

何か今不穏な言葉を聞いたような……

「えっと……、ごめん、よく聞こえなかったんだけど、後半部分なんて言ったの？」

『…偶にわたくし共【神の使い】として、お手伝い「まったー!!」…はい?』

セリフの途中で遮ってごめんね。だけど、そんな怪訝な顔で見ているくないで…

「何故、私が神様の手伝いを?しかも、異世界を幾つも巡るってど

「ういう事!？」

『あー、これもまた説明しにくい事なんです。実は……』

「はあああ!？最近の違法召喚魔法で召喚される人間の数が急増？
更には優秀な人材を他の異世界の人間に奪われて、帰ってこない！
？」

あまりに突飛過ぎる上に、話が私の斜め上にあり過ぎて若干ついていけないが、話の内容をなんとなく理解して、それが大変な事なのだということは分かった。そんな私に、サーシャは尚も話を進めてくる。

『現在、他の異世界機関でも大変深刻な事態になっておりまして、
私たちがいくら邪魔しようと画策しても、干渉できる制度に限度があり、中々思うような成果が得られないのです。』

以前なら、きちんとその世界の管理者が他の世界の管理者の許可を取って、優秀な人材を無事に帰還させるという規定に沿って行われていたのですが。どうやら、最近の神官や巫女たちは神（管理者）の信託（声）がきちんと聞こえていないようで、勝手に他の世界から人間を召喚させては、魔王やら戦争やらに駆り出して、そのまま帰させない、返さないという状況が増えているんです。

他の世界から召喚された者は、呼ぶだけなら才能ある人間にも出
来ますが、返すには我々管理者の力とその世界の陣に対するタイミ
ングが必要なのです。ですが…」

「今の神官や巫女さん達にこっちの声が聞こえてないって時点で、
タイミングが合わないのはしょうがないよね…」

『…そうなんですよ。お陰で、優秀な人材が集まる世界では、全体
的に過疎化や文明停滞が進行してしまっていて。このままでは、い
つか人類崩壊。果てや、絶滅危惧種になってしまいます』
「ええ！！これって、そこまで深刻なのっ!?!？」

今まで人事のように聞いていたが、絶滅するという言葉には流石
にヤバいのではないかと、他の世界のことながら心配になってきた
私だった。そんな私をよそにサーシャの説明は続く。

『勿論ですっ!!…わたし達管理者は管理をする上で、この場を離
れるわけにはどうしてもいけません。ですがっ!このような事態、
これは世界管理協会第一 地球 管理局務長としては放っておくわ
けにはいきません!そこで、琴栄さんの出番なのです!…!』
「はっ」

何故ここで私の名が呼ばれるのでしょうか?…非常に嫌な予感が、
こうビッシバッシ来るのですが。どうなのでしょう?か、みなさん。

今迄熱の籠った弁舌で、力説していたと思えば、今度は可愛らし
い見た目に反して鋭い目を私に向けてきた、サーシャ。私の背中に
冷や汗が流れる。

『琴栄さんは、今偶然にもわたし達の力を魂に宿しています。不慮の

事故とはいえ、こんな逸材は他に稀を見ません！」

「へ、へえー、そうなんだ。」

そう言っつて、なぜか私の両手をガシツと掴むこの手は何なのだろうか。そして、今だに冷や汗が止らない。ここまで来ると何かもう、ホント嫌な予感しかしないのだ。

『普通なら私たち管理者の暴走した力をその身に受けて、魂まで消滅しなかったのはもう奇跡としか言えません！更にはその力を己の魂へと刻み込み、変換した琴栄さんの魂は、人間と神との間に出来た、正に【神子】と言っつていい存在なのです！！』

…今この子、サラツと前半とんでもない事を言いませんでしたか？；；

『そんな琴栄さんは、まだわたし達の力を上手くコントロールする事が出来ていません。その為、貴方が知っている世界で、力のコントロールの仕方を身につけ、更には戦い方を学んで頂きます。急に異世界に飛ばしても、戦い方を知らなければすぐ死んでしまう恐れがありますので、それは避けねばなりません！…何せ、この事態を收拾出来るのは最早貴方だけなのです！琴栄さん！！』

なんか、いつの間にか話がでかくなっている気が……

「…あー、とりあえず。この話っつて最早決定事項だよ。私に拒否権なくない？てか、断ったら断ったで恐ろしい事になりそうなんだけど」

『………そんな事ありませんよ』

「否定するならもつと早く答えてほしいな。セリフとの間が空きすぎだからー」

とりあえず、私に拒否権はなく、異世界行きは決定事項のようだ。思わず、この先の事を少し考えて気が重くなった。そんな重要な仕事で、私なんかに務まるのだろうか。まあ、決まってしまった事はしょうがない為、やれる事はやるうとは思いますが…話を聞いてると中々不安が拭いきれない。

そんな私を知ってか否か。サーシャが今度はその力に関しての説明を始めた。

『まだ琴栄さんには説明していませんでしたが、琴栄さんが魂に刻み込んだその力はおおよそ5つのエネルギーで出来ています。1つは霊力、2つ目は魔力、3つ目は気、4つ目は念、5つ目はチャクラ。』

琴栄さんにはこの各5つの能力が特化した世界へ行って頂き、その5つ全てを己の力でコントロールする事を前提に力を身につけて頂きます。それぞれに特化した世界は出来るだけ、琴栄さんが知っている世界。アニメとか漫画、映画の世界で探しますので安心して下さい。全く知らない世界よりはまだマシだと思いますので』

うーん。なんかどれも聞き覚えのある力ばかりのような………つか、

「なんちゅう、チート」

いや、流石神様の力とでも言うべきなのか一部とはいえ、5つも能力があるってどんだけよ。

『まあ、万能ではありませんが。これだけの力があればそう簡単に

死ぬ事はないでしょう……たぶん』

最後のとこだけ、なんだかすっごい不安になるんだけど!!

『一部とはいえ、神の能力を継いでしまった魂では普通の人間の身体では耐えきれません。ですので、此方で身体は用意します。希望の容姿などがありましたら、今のうちにおしゃってください』

「えっ? いいの?」

『はい。琴栄さんの元々の肉体は私の力で消滅させてしまったので、お詫びです。何でも言ってください』

「え? じゃあ、私って今魂だけの姿なの?」

驚いて、改めて自分の姿をしてみるが、たいして変わった処は見受けられない。

『今この空間に居る限り、琴栄さんの姿は以前の姿のままの形を保っています。間違いなく今の琴栄さんは魂だけの存在ですよ。その姿になっているのは琴栄さんの魂が以前の身体の記憶をまだ持っているからです。魂は云わば人間の記憶メモリーとでも認識していただいて結構です』

なるほど、なんだかよく分からないが、機械というメモリーカードのようなものか。

『それで、容姿はどう変えますか?』

「うーん。まあ、あえて言うなら【夜桜】みたいなイメージ? がいいかな。日本の美? って言うの? まあ、なんかそんな感じでお願います。あまり、派手じゃない方がいいな。勿論、黒髪黒目で」

『…凄く抽象的ですが、ご希望とあらばなんとかしましょう。…ふふふ、徐々に腕がなります』

ゴキツゴキツゴキ

そう言って、凄く楽しそうに手を鳴らしながら何時の間に持っていたのかパソコンらしきものを操作しながら、ひたすら画面を見つめぶつぶつぶつと呟き始めた。

この時の私はまだ知らなかったのだ。まさか、この時の判断がすでに間違っていたなんて。そう、このサーシャがこの世界では知らない者はいない程に手腕の持ち主で、夢中になると周りが見えず、己が満足するまで完璧を追い求めてしまう、一種の病気のような特性を持っていたとは。

更に、世界でも2つとない【天才敏腕技師・サーシャ】の異名まで持っているとは…。その結果、己の身体となる肉体がとんでもないことになっているなど、この時の琴栄は全くと言っていいほど知らなかったのだ。この後、もっと詳しい詳細を述べておくべきだったと、深い後悔に悩まされることになるなど……。

いや、もう十分チートじゃね？

サーシャがパソコンに向かい始めて、どれくらいの時間が経ったであろうか。10時間くらいは経っているのではないか。いや、下手をすると1日経ってしまったのかもしれない。この空間では何処を見渡しても白一色の為、時間の経過を確認する事は非常に難しい。それに、今魂だけの姿だからなのか、食欲も睡眠欲求もないようだ。

今だにパソコンの前から離れる気配のないサーシャの邪魔を、出来るだけしないように琴栄は床？に座りながら目をつむり、今までの情報を脳内でまとめあげることにした。

それから更に時は経ち……

『よしっ！琴栄さん、身体の方完成しましたよ！完成度としてはわたしの今迄のトップ5に入るくらいの出来ですね！きちんと希望に添えていると思います。ついでに、身体的特典も幾つか付けておきましたので、アチラの世界に行った時にでも確認してください』
「ありがとうございます。お疲れ様」

いきなりパソコンから顔をあげたと思うと、どうやら私の身体は出来たようだ。それには普通に私も嬉しいので、サーシャと一緒に喜ぶ。そして、サーシャはこの際だからと、私に関する項目を早めに決めて行くこうと思ったようだ。

『さて、身体の方は後ほど世界に転移すると同時に送りますので、他の事もこの際ぱっぱと決めて、終わらせましょう』

「そうね。あと、何を決めればいいの？」

そう床に胡坐をかきながら応える私に、サーシャも私の前にちょこんと座る。

『そうですね。とりあえず、此方の責任で貴方を消滅させてしまっただお詫びといっちはなんですが、幾つか可能な限りの願い事を叶えたいと思います』

「…ふむ。じゃあ、私の家族の幸せをお願いしたいかな。贅沢は言わないから、老後まで安心して暮らせるだけの幸せを送ってほしい」
『…わかりました。他にありますか？』

一瞬悲し気に顔を暗くするサーシャだったが、すぐに立ち直り笑顔を見せる。

「そうだなあー。幾つか聞きたいことあるんだけど、まずは私から行く世界ってもう決まった？」

『ええ、だいぶ前にメールで行先が送られてきました』

「へー、ちなみに何処？」

『えっと、ちよっと待ってくださいね。確か、このファイルに入っていた筈…っと、あった。これですね』

そう言って、先ほどのパソコンを操作しながら目的のモノを見つけたらしく、分かりやすく説明を始めた。

『1つ目の霊力では、BLEACHという処ですね。2つ目の魔力はHalley Potter、3つ目はドラゴンボール、4つ目はhunterxhunter、5つ目はNARUTOの世界ですね。わたしはあまりどれも聞いたことない世界ですけど、琴栄さんはご存じですか？…って、どうしたんですか、琴栄さん』

サーシャの言葉を聞いた私は胡坐をかいたまま、思わず身体を地にひれ伏せさせてしまった。その私の様子にサーシャが慌てたように声をかけてくれながら、心配させないようにゆっくりと身体を起こす。

「い、いや、どれも聞いたことある世界で安心したと言っべきなのか、思いつきり死亡フラグだと言っべきなのか。……確かにあの5つの力を聞いた時に、若干こうなることは予想してはいたけどさ、うん」

そう答えながら遠い彼方を見つめる私を誰が責められるだろうか。特にドラゴンボールとかないだろ。思いつきり、死亡フラグだよ。フリーザとかサイヤ人とかさー、ないよねー。あれ、もう化け物並だよ。即死亡ですよ。なに、私に死ねとおしゃっているのか。そうか、そうなのか。へー

つと、そろそろ現実に戻らねば、最早これは決定事項。私に拒否権はないだろう。ちよつとした諦めを滲ませながら、身体を起こして改めてサーシャに尋ねる。

「でさ、その世界に行くに当たって、幾つか質問があるんだけど、いいかな」

『いくらでもどうぞ』

「じゃあ、遠慮なく。まず1つ目、世界を周るって言うってるけど、その際の時間軸はいじれるの？」

『無理ですね。何時どのタイミングであちらの世界に着くかは、わたしでは操作できません』

「…そう。じゃあ、2つ目。あっちに着いた時の私の身分証とかど

うなるの？身分証がないと身動き出来ない世界だってあるでしょう」
『ああ。それら全ては此方で手配しますので、心配ありませんよ。
例え、知らない世界に落ちたとしても、各世界の管理者が貴方の身分証を手配してくれる事になっていきますから。必要ならば住居も簡単に手に入りますので、そのつど管理者へと連絡をとってください。ただし、我々が発行出来るのは身分証だけ、何かしらのライセンスはご自身で取得して頂くことになります』

いや、もう身分証明してくれるだけで、十分ですよ。めっちゃ親切や、管理者の皆さん！！ちよつと感動してしまった。

『他に聞きたい事はありますか？』

「あ、ああ。えっと、3つ目。たぶんこれは予想でしかないけど、自給自足？」

『勿論です』

「ですよねー」

がくっ

首が思いつきり下へと向く。世の中そんなに甘くないよね。勿論、分かっていたとも！！

そんな風に落ちこむ私に何を思ったのか。サーシャは少し困った顔をしながら、嬉しい提案をしてきた。

『しかし、今回琴栄さんは初めての異世界の旅ですから。初めのうちの1年は此方で給金を出しましょう。いずれは、1つの異世界解決毎にその働きに見合った給金が支給されるようになります。もしかしたら、修行中によその世界から緊急の連絡が入るかもしれません。ですが、その時はそのままその管理者の指示に従って、動いてください。どの管理局でも貴方の命の保証をしますので、管理者自体が貴

方を傷つけることはありません』

「ん、了解。」

『後は何かありますか？』

「うん、話聞いて思ったんだけど、その私が稼いだ給料は他の世界だと使えない場合があるよね。だから、どの世界に落ちてもすぐ生活できるように小型で持ち歩けるくらいの【換金】アイテムがあったらくれないかな」

『…なるほど、そこまでわたし共の頭はまわりませんでした。確かに、そうですね。琴栄さんの場合は各世界を周るのですから、当然通貨も違いますね。…分かりました。此方のアイテム開発研究機関に問い合わせてソッコで作らせますので、暫くお待ちください』

そう言うのが早いか、これまた何処からか出てきた携帯を片手に何処かへと連絡をつけ、一言一言告げるとブツツと通話を一方的に切った。そんなサーシャはニッコリと可愛らしい笑顔を私に浮かべた。

『今、ソッコで作らせていますので、出来あがるまでお茶など飲んで、もう少し詳しい説明をしましょうか』

「……………うん、そうだね」

ここは、あえて突っ込まないよ？いや、ホント。なんかちょっとサーシャって腹g『何か？』 何でもありません！！

『それでは、改めて説明しますが、もう質問などはありませんか？』
「うん、今のところそんなだけかな」

『分かりました。では、こちらに。お茶を用意しましたので、飲みながら話しましょう』

そう言っただけで連れられた処はさして離れていない場所で、もうすでにツツコム事に疲れた私は、平然と何時の間にあつたのかわからない、白い可愛らしいアンティークテーブルと対の椅子へと腰掛けた。そして、すでに置かれていた湯気の立つ紅茶を啜りながら、私たちは話し合いを始めた。

『さて、おおまかな琴栄さんの仕事内容なのですが、琴栄さんには他の世界へと赴いて頂き、無断召喚をした者たちから召喚された者の救命と元居た世界への帰還を手伝ってほしいのです。更にはその世界にある召喚魔法の破壊、もしくは封印をして頂きたいのです。』

どの世界がどのくらいの間人を召喚しているかはまだ調査中ですので詳しい事はわかりかねますが、同じ世界で間隔を置かず何度も召喚している世界もあります。まずはその世界から周って頂きます。出来るだけ早く。その世界の調査が終了次第、例え修行中であろうと、琴栄さんには此方を優先して頂きます。よろしいですか？』

「…了解。ついでに覚悟も、早めにつけておくよ」

そう言う私に、サーシャは驚きを露わにしたかと思うと、次の瞬間にはその可愛らしい顔を苦渋の表情に変え視線を下げる。

『……気付いてらしたのですか』

「まあ、ね。同じ世界からそう時間を置かずに召喚って、大抵そういうのは何らかの目的のために人を集めているか、もしくは……何らかの理由で使い物にならなくなった。のどちらかだろうからね」

私は手に持っていたカップと静かにソーサーへと置くと、サーシヤへと視線を合わせた。

「今のところ私しか居ないんでしょう」

『……はい。わたし達の力を一部とはいえ持った琴栄さんならば、いくら世界を跨いでも周りに影響を及ぼすことなく、召喚された者を返すことが可能です。その上、琴栄さんにはわたし達の声が無効にいても聞こえるようなので、この仕事は琴栄さんにしかできません。どうか我々に協力をしてください』

そう頭を下げるサーシヤを見やりながら、私は困った顔をする。とにかく、早く顔をあげさせるように話を振る。

「別に、断ろうなんて思ってないよ。だから、頭を早くあげて」

そこで、ようやく頭をあげるサーシヤ。

「ここまで話が進んだら、もうやるしかないでしょ。私もあんな話聞かされて、協力出来る力があるのに。はい、そうですか。と尻尾巻いて逃げられないよ」

私の言葉に、再び出会った頃のように目の縁に涙を溜めるサーシヤ。震える声で

『ありがとうございます』

と、一言だけ告げられた。その後は、私がこれから行く世界はどういった処なのかと言う話題になり、結局開発局から『完成した』という連絡が入るまで、その話題で盛り上がったのだった。

『他に必要なモノとかありませんか？大丈夫ですか？』

「大丈夫だよ。サーシャ」

開発局から連絡が入ってから、ではそろそろ出発しよう。という頃、サーシャはまるで我が子を心配するようなセリフを繰り返しては、私も同じセリフでもって返している。こんな事が何回か続いているお陰で、いまだ出発出来ない。

あと、これは余談なのだが、サーシャはこう見えてもわたし達の何千倍も生きている。そのため、口調も自然としつかりしたモノになっっているようだ。

最初に出会った頃のあれは、サーシャがこの任に就いて初めての事で動揺してしまい、何故が精神のコントロールが効かず、あんな事になっただけだ。

まあ、そんな事はどうでもいいのだけど…

「いい加減、そろそろ出発させてほしいんだけど……」
『うっ。…だって、心配なんです！琴栄さんは今の能力だけでいいと言いましたが、やはり不安です！こちらで、幾つかピックアップさせてくださいね』

そう言っつて、またもや小型の機械で操作し始めたサーシャを私は慌てて止めに入る。

「いやいやいや。今のままでも十分チートじゃないですかっ！（まだ、コントロール出来ないけど…）これ以上何を増やせと!？」

言いながら、サーシャに詰め寄るが、サーシャは手元の機械に入力し終えたのか。表情をニツツマリと満足そうに歪めた。

『残念でした。もう、入力済みです。取り消しは出来ません。…あとは、転移すると同時に魂へと書き換えを行うだけです。書き換えるの影響により、あちらに着いてすぐは軽い眩暈と高熱が暫く続きますので、十分気をつけてください。 それでは、転移させます』

私が抗議の声をあげる前に、サーシャは何やら呪文と空中に浮いたタッチパネルを素早く操作しながら、口早に説明する。やがて私の身体から黄金色に輝く光が淡く放たれ、次第にその光は強みを帯びていき、目も開けられなくなつた。あまりの眩しさに、瞳を閉じたと同時にシュッパツっという音と共に、先ほどまでの白い空間から私は消えてた。

私が消える瞬間、サーシャが『また後ほど、お会いしましょう』
とい声だけが、その時の私に聞こえた最後の言葉だった。

着きました。あー見覚えのある建物が見えます

「クツ」

次第に弱まっていく光が完全になくなり、私は静かに目を開けた。すると、そこはどこかの丘に面した森のようで、丘の向こうには何やら防波堤に囲まれたでかい見覚えのある建物がたくさん建っていた。所々高層ビルのように高く白い棟に、橙色した屋根瓦を眺めながら、私は確信した。

間違いない、ここは

「BLEACHの世界」

『ピンポンピンポンポーン　せいかい！』

「つつ！？」

急に頭に響きだした、どこかお茶目で若い男の声。思わず身体をビクツつと震わせ、驚きに息を詰めるが、すぐ冷静になり、静かに周囲を見渡した。だが、周りには誰も居なかった。それどころか、人の気配すらないのだ。途端に訝しんだ私は出来るだけ平静を装い、周囲を警戒しながら声の持ち主へと問いかけた。

「…………だれ？」

『おや？案外冷静なんだね。流石あの【天才敏腕技師】が送り込んできただけの事はあるよ。あと、僕はこの世界の管理者、仙氣セキキ。君がこの世界に居る限り、君の身元保証人&補助みたいなものだから、これからよろしくね。琴栄ちゃん』

どうやら彼はここの管理者だったようだ。しかし…

「…姿が見えないのだけだ」

『そりゃあ、そうさ。僕達管理者は、世界の【外側】に存在はしていても、力が大き過ぎるせいで、【内】にまでは存在出来ないからね。それと、今君と会話が出来ているのは、直接君の脳を通して念を送っているからだよ』

「なるほど、念話が…」

『そういう事。まあ、一つアドバイスするなら、コレ脳内で会話出来るから、わざわざ声に出す必要はないよ。てか、他人には独り言にしか聞こえないから早めに止めた方がいいんじゃない？癖になると中々治らなくなるよ』

念話に対する注意を受け、最もなので琴栄も素直に従う。

わかった。それと、私はこれからどうすれば？此処はどうやら現世ではなく戸魂界ソウル・ンサエティのようだし

『確かに此処は戸魂界だけど、今現世に降りるつもりなら、君じゃ何の意味もないから。やめときなよ』

………どういう事？

意味が分からず疑問を口にする、仙氣は可笑しそうに話だした。

『だって、今の君が現世に降りたところで、靈力の使い方も知らないんじゃない役に立ってないだろう？』

………

確かに、今の自分では何の意味もない。途端に無力さを感じたが、今はまだ始まったばかりなのだとすぐに開き直る。

それじゃあ、私はここで靈力の使い方を学べばいいのね

『そう。ここには真央霊術院っていう【死神】を育成する機関があるから、そこで学んだ方が色々面倒がなくていい』
分かった。でも、そうすんなり入れるもの？

なにせ此処は死神と魂魄が住む世界なのだ。他の世界から来てそうそう容易に入れるとは思えない。と、不安そう考えていた私に、仙氣はまた可笑しそうに笑いだした。

『フハハ。そんなの、なんの心配にもならないよ。なんの為に僕ら管理者が君の補助に周ってると思ってるの？それに、ここは僕の管理世界だし、あの局長からも説明は受けたでしょ？…ああ、因みにもう編入手続きはしてあるから安心して行ってきなよ。この書類を持って真央霊術院の受付にでも出せば無事に入学出来るから』

そういつや否や、何も無い処からパツと表れた1枚の紙が琴栄の手のひらにヒラツと落ちてくる。見ると、そこには【真央霊術院入学許可書】と記されていた。

……何時の間に

あまりの仕事の早さに、呆然と掌の書類を凝視する。

『ん？そりゃあ、君が此処に来るって聞いた時にね……よれよりも、琴栄ちゃん。君、身体とか大丈夫？』

…え？

『いや、え？じゃなくて。琴栄ちゃん、まだ魂の書き換えしたばかりでしょ？眩暈とか吐き気とかないの？』

……そう言えば、さっきから身体が異様に重いような あっ

ドサッ

仙氣から指摘された途端、全身から力が抜け、崩れるようにして地面へと倒れ込む。

『あらら。言ったそばから。…ていうか、そんな身体でよく今まで倒れなかったね。僕はそっちの方が驚き。やつぱ、あの局長の暴走した力を受けて消滅しなかっただけあるよ、ホント』

呆れたようにため息を漏らす仙氣をよそに、私は倒れたまま身動きが取れない身体を必死に起こそうとしていた。だが…

っ、

身体はピクリとも動かなかった。それに気付いた仙氣が琴栄に注意するように声をかけられる。

『ああ、今は動かない方がいいよ。まだ、身体と魂が完全に交り合っていないんだ。そのまま暫く休んでいるといいよ』

しかし、そうやってかけられた言葉は女の琴栄にとってあまりに非情だった。

……地面に転がったまま、どう休めと言っんです

念話で会話をする分には何ら支障はないようで、ここぞとばかりに愚痴を漏らす。

『そうは言ってもねー。僕にはどうすることも出来ないよ。…まあ、大丈夫でしょ。その様子だと、あと5時間もすれば動けるようになるだろうし』

… 5時間もこのまま

『まあ、5時間なんてあつという間さ。むしろ、5時間で済みそうな状況が驚異的だよ。ホントに、琴栄ちゃんって人間だったの？ 甚だ疑問だよね』

姿は見えないが、あまりに軽いモノ言いに段々むっときてしまう。

これでも、人間ですよ

あれ？でも、今尸魂界に居る自分は本当に人間なのだろうか？ 突如として疑問が湧いて来た。そんな風にぐるぐる考えていた自分に、その答えはすぐ返ってきた。

『……何言ってるの？ 琴栄ちゃんは人間と管理人つまり、人間で云う「半神半人」だよ？』

………は？

言われた事について理解が追いつかないのか疑問だけが口をついて出た。それに、やれやれといった感じで、仙氣はダルそうにしながらも説明をしてくれた。

『だからねー。琴栄ちゃんって半分僕たちみたいな管理者でもあり、半分は人間でもあるってことだよ。つまり、此の上なく中途半端で矛盾した生き物なんだよねー。琴栄ちゃんって』

中途半端……

その言葉のあまりのショックに頭が真っ白になる琴栄。しかし、そんな琴栄に構わずなおも仙氣の説明(?)は続く。

『大変だねー、琴栄ちゃん。寿命だって大幅に伸びちゃってるし、

歳はとれないし、気のながーくなるくらいの時を過ごさなきゃならないんだから。まあ、半分人間でもあるから殺されれば死ぬのは当然だけどね。』

人が放心している間、何やら好き勝手言ってくれているが、とりあえず、放心している間に段々と眠気が襲って、瞼が重い。

……………ねむっ

『あらら。もう、身体が回復に向かっているの？……………ホント色々と規格外だよ、君。普通、こんな短時間で身体と魂が定着なんてしないんだけどなー。まあ、いいや。琴栄ちゃん、僕のこの世界を是非楽しんでよ。また、たまに様子を見に来るからねー、おやすみ』

そう言った仙氣の言葉を最後に、深い眠りへと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1295z/>

幸か不幸か

2011年12月13日02時10分発行